

京都・法然院

京都・鹿ヶ谷の法然院は、山に向かつて石段を上がり、左手にやぶさきの山門、右手が墓地だ。屋間でも暗い山かげに紅しだれ桜が一本あって、そこだけが浮き立つように明るく見える。散り始めの時期に訪れると、根元の墓石に花びらが降りかかっていた。

自然石に「寂」の一字。谷崎潤一郎の墓だ。

1961〜62年「中央公論」に連載した小説「瘋癲老人日記」の主人公、卯木登助は東京の人間だが、京都に墓を作ろうと思いつく。長男の妻、颯子と看護婦を伴って京都を訪れ、自らの墓地を法然院と決めた。石屋に注文する墓石のかたちに、ある秘密の思いを込めて準備を進める。



法然院について、ハ一步寺ノ境内へ這入ルトアノ通り森雨トシテ心ガ自然静マリマスと、登場人物に語らせる。

樋田真章任職(54)は「谷崎さんが法然院のファンということ」で、宗派は日蓮宗で違っけれど、先々代任職の祖父が受け入れた」と話す。

颯子のモデルという女性がいる。谷崎の義妹の息子の妻だった渡辺千萬子さん(81)だ。

谷崎は京都を去って熱海に転居した後も京都・北白川の千萬子さん宅に滞在した。さらに千萬子さんに法然院前に引越すよう勧め

た。そうすれば、ハ死後もそばにめられますよと千萬子さんに手紙を書いている。

「夜なんか怖くない静か。お墓からは西の空が見え、谷崎がそれを信じたとは思わなければ、西方浄土みたいな景色が気に入っていたのよ」と、千萬子さんは振り返る。

記者も昭和30年代、町内に住んでいて、墓地で遊んだことがある。後で知ったが、画家の福田平八郎、「貧乏物語」の河上肇、「いき」の構造」の九鬼周造ら有名人が眠っている。

近年、千萬子さんは小田原に移った。旧宅の向かいの哲学の道沿いで八ツ橋の店を営んでいた大石ふみよさん(88)は「千萬子さんもいつもおきれいだ。谷崎さんも、千萬子さんが喜ぶからと八ツ橋を買われましてよ」と懐かしむ。

谷崎が家を建てる間、仮住まいした東京の目白台アパートに同時期、入居していたこともある作家

墓石に秘めた煩惱

警助は谷崎本人を思わせる竹藏の老人で、颯子のハ柳蝶ノヨウニ華奢テ細長イノ足にひかれてい

る。颯子の足型を取って墓石に刻み、仏足石に見せかけ、死後も颯子に踏まれ続けることを願う。

谷崎が声優を務め、62年に放送されたラジオドラマ「瘋癲老人日記」が文芸誌「新潮」5月号の付録CDに収録されている。谷崎は淡々とした語り口で、妄想を膨らませる警助になりきって日記を読み上げている。



自筆「寂」の文字が彫られた谷崎潤一郎と松子夫人の墓(左)。紅しだれ桜から花びらが舞い散る。右に「空」と書かれた渡辺家の墓(京都市左京区の法然院で)

メモ 法然院(京都市左京区鹿ヶ谷御所ノ段町)は、浄土宗の開祖法然が弟子住蓮・安楽と念仏修行を行った草庵が始まり。1206年、法会に参加した後鳥羽上皇の女房松中・鈴虫が突然出家。上皇の逆鱗に触れ、法然は流罪、安楽・住蓮は死罪となり、草庵も荒廃した。1680年に再興された。境内、墓地は自由に入れる。伽藍は非公開だが、春と秋に特別公開される。谷崎も滞在した渡辺家は門前の法然院町に、哲学の道に面して立っていた。谷崎の死後にマンションに建て替えられた。



谷崎も滞在した渡辺千萬子さん宅は谷崎没後、マンション。近年まで千萬子さんが一階で喫茶店を経営していた。庭には紅しだれ桜が咲く(京都市左京区で)

小説の中とはいえ、若い女の仏足石に踏まれたいと考えること自体、煩惱であり、罰当たりでは。「そんな偽物くらいで仏さまが怒るものですか」(森恭彦)



京都「丸平」の雛人形(昭和初期)

京都の老舗の雛で、「細雪」の家族は雛人形を洋間に飾って春を祝った。洋間の雛飾りはモダンと伝統とを調和させた阪神間の新しいライフスタイルを象徴していた。芦屋市立美術館博物館蔵。(井上勝博・芦屋市谷崎潤一郎記念館学芸員)

芦屋市谷崎潤一郎記念館(兵庫県芦屋市伊勢町12の15)で6月26日まで開催している春の特別展「四姉妹の昭和一よみがえる『細雪』の世界」で展示